

いしぶみ 唄の流れる 碑

横松和平太

塩の道を歩く旅を企て、日本海から太平洋まで歩き繋ぎ通したことがある。糸魚川の海岸から列島を横断し浜松市の海岸まで約400kmの道だった。多くはフォッサマグナとか中央構造線とか言う、かつて列島がぶつかり捻れた裂け目・狭間を縫うような道だ。

千国街道とか秋葉街道とかいった道は、信仰の道でもあるが海岸地帯から内陸の信州に塩を運んだ道だった。馬や牛の背に荷駄を載せ人が歩いた道である。越後の国から信州に入り、松本平を南下し塩尻峠に立った、2012年秋のことだった。ここは列島の分水嶺、北アルプスをはじめ中央・南アルプス、そして八ヶ岳から富士山まで視野に収めることができ、日本は実に山国だと実感できる場所である。

眼下には南に諏訪湖を中心に諏訪盆地が広がっている。古代には建御名方神の神が戦に敗れて逃げ込んだ地とされ、諏訪大社が鎮座するところだ。塩の道はまさしく歴史の道なのだ。峠から諏訪湖半に向かって下ると、天竜川が流れ出す釜口水門がある。

川の源流という普通のイメージからは大きく異なって、ダムのような湖から流れが始まっていた。その水門のすぐ近くに小さな公園があった。諏訪湖畔の道は歩いたり走ったりするのに快適なようによく整備されている。湖畔の憩いの場所の一つのようだ。

その一隅に銅像と立派な石碑があるのに気がついた。

琵琶湖周航の歌

銅像は旧制高校の学生の姿で台座には小口太郎とあった。その傍らの石碑には、「我は湖の子さすらいの...」で初まる「琵琶湖周航の歌」の歌詞が刻まれ、創作者 小口太郎とあった。この歌は、学生時代によく唄ったものである。確か旧制三高のポート部の歌だったように思っていた。琵琶湖周航の歌の碑が、どうして諏訪湖畔にあるのか？ と素朴にいぶかしく思ったものだ。しかし作詞者が小口太郎であること、そして彼は岡谷市の生まれで旧制諏訪中学の卒業生であると、この時初めて知ったのである。旧制三高に進学しポート部で活動、故郷の諏訪湖を想いながら「琵琶湖周航の歌」を作詞したのだと。

さらに碑の側には、ボタンがついた仕掛けがあり、押すとあの懐かしい唄が流れ出した。

思わず口ずさんでいたが、それならば作曲は誰が？ 琵琶湖畔にも碑はあるのだろうか？ というように関心は広がり、調べ癖が始まった。

大正6年(1917)から唄われはじめ、作曲は吉田千秋、高名な地理学者吉田東伍の息子であった。小口と吉田は二人とも若くして亡くなっており、互いに面識はなかったということだ。吉田の原曲(「ひつじ草」)に小口の歌詞を当てはめ唄われたものといい、旧制三高の大正時代から寮歌・学生歌として広く唄われ続けてきている。

この歌がポピュラーになったのは加藤登紀子のレコード(1971年)からというが、諏訪湖畔にこの碑と銅像が建てられたのは、1988年(S63)である。小口太郎生誕90周年記念の年であった。

そもそもの歌の舞台である琵琶湖の周辺には竹生島、今津など4ヶ所に碑があるが、唄が流れる仕掛けはない。しかし、琵琶湖大橋には道路にメロディの流れる仕掛けがあるとのことであり、今津には資料館まであるとのことだ。

だがそんな中、唄の流れる碑にそれ以前にも出合ったことを思い出していたのだった。

おやじの海

瀬戸内海に浮かぶアート島・直島には惹かれるものがあり何度も訪れている。最初に上陸したのは2004年であったから、もう10年以上も前のことになる。ホテルとミュージアムが一体となったベネッセハウスに泊まり、瀬戸内の海を眺めて見たかったのだ。

ホテルの下の海岸には、草間弥生デザインのオブジェ「黄色いカボチャ」があり、他にも幾つかモダンアートのオブジェがある。その海岸に連なって松林の海岸があり、そこには「ふるさと海の家・つつじ荘」という宿泊施設が建っている。こちらは対称的に和風デザインである。その門前に「おやじの海」の記念碑があったことを憶えていた。ボタンを押せば村木賢吉のあの塩辛い歌声を聞いたことを。村木賢吉は秋田県の出身だと覚えていたので、北の海のイメージがあった。瀬戸内海に記念碑があることが驚きだった。

記念碑建立の由来を記したプレートの説明で、何故直島に？ という疑問は氷解した。直島には大きな精錬所があり、そこで彼は働いていた時代があったこと、作詞・作曲者は地元と同僚の人であり、この歌の舞台は瀬戸内海であったことを。

この曲は発売してから1979年(S54)にヒットするまで7年もかかったが、碑が建てられたのは1998年(平成10)のことである。曲が生まれて26年後であった。因みに碑から歌声が今流れる歌手の中では村木賢吉(1932-)は最高齢者(83歳)である。

昨年(2014)、また直島に行ってみた。尾崎放哉の記念館見学など小豆島訪問と併せてのことであった。記念碑のある琴弾地浜に立ち寄り、あらためて「おやじの海」を聞いてみた。静かなリゾート地にはやや大きすぎるかと思えるような大音量であった。辺りの松林を歩いてみれば、以前には気付かなかった碑があった。崇徳上皇と若山牧水の和歌の碑である。この二人もかつての直島ゆかりの人であった。崇徳上皇は、政変で讃岐に流される途中に滞在したといい、怨霊の人、魔王と怖れられた人である。直島という島の名前の命名者と伝わる。今やアートの島というのがこの島のウリなのだが、日本の伝統文化である和歌だけでなく大衆文化の演歌を体感できる空間があるのがまた良い。

それぞれ平安、大正、昭和と歌が生まれた時代は異なるが、石碑のカタチは時代と共に変化しながら受け継がれてきた。単に目で文字を読むだけでなく、メロディと唄声という聴覚まで動員する仕掛けにまで進化してきているというのも、また興味深いことであった。

東海林太郎の唄声

諏訪湖畔の「琵琶湖周航の歌」で、「唄の流れる碑、という存在にあらためて気づかされたのだが、次に遭遇したのは秋田市であった。昨年(2014)の夏、「西馬音内盆踊り」を味わいたくてバスツアーに参加してみた。普段はバスツアーに一人で参加することはないのだが、西馬音内は交通のアクセスや宿泊の便が余りよくなかったからである。

独特の風情がある盆踊りを期待していたが、それ以上であった。「風の盆」も体験したことがある。あちらが幽玄、優美とすればこちらはそれに「俗」の味わいがあった。篝火に照らされた通りを踊りが練り歩く。「音頭」と「がんげ」と二種あるが「音頭」の囃子は秋田音頭の原型のようなところがあり、明るくコミカルで野性的な楽しいものだった。またいつか訪れてみたい。夜遅くまで堪能し、バスで1時間ほど走り秋田市中心部まで移動し、ビジネスホテルに泊まった。小さな町故の宿のキャパ不足だからだ。弱点をもともしないツアービジネスの営業努力の一端を垣間見たのである。

翌朝のことであった。出発前の時間を利用して近くを散歩してみることにした。かつての城跡・千秋公園に入り歩いていたら、古い歌謡曲の唄声が流れてきた。東海林太郎の声だと思った。「へそお〜りの鈴さえ寂しくひびい〜く……」曲は「国境の町」だ。懐かしい。その昔、テレビの懐メロ歌番組でよく見かけた直立不動で唄う姿が脳裏に浮かんだ。

唄の流れる方に近づいてみれば、公園の一角に彼の胸像とか説明板や碑が建っていた。ここにセンサーが仕掛けられていたのだ。説明によれば、「赤城の子守唄」など代表曲6曲がエンドレスで収録されている。東海林太郎(1898-1972)がどうして秋田なのか？ は、彼の出身地だからであった。没後の1975年(昭和50)に顕彰会によって建てられたものだった。

懐メロ歌手として私は知っているが、この人の全盛期は戦前である。昭和初期の不況期を背景に軍国主義が色濃くなってきた時代だ。1935年(昭和10)頃にヒット曲を連発していたと知れる。彼の曲が生まれた頃からすれば約80年経っている。歌の命は歌手、作詞家、作曲家達が生み出したものだが、こういうカタチで生

き続けるものかと思った。記念碑の唄声に遭遇しなければ、私は彼を忘れたままになっていったかもしれないのだ。

三度も旅で唄の流れる歌碑に出合ったことから、唄声の流れる仕掛けを持った碑の存在がとても気になりました。秋田での東海林太郎の碑以来、旅の際に歌謡曲碑の存在が気になりはじめた。さらにその由来はどこにあるのか、どれくらい存在しているのか、そしてこれからも造られ続けるのかどうか？ と思いは深まっていた。例によって関係する著作物を調べ、Web上で検索し、一部は現場まで足を運んで確かめてみた。これまで調べたところを以下纏めてみたいと思う。

歌謡曲の碑

石碑そのもののルーツは古代中国の殷の時代にあり、日本でも8世紀頃建立されたものが関東、東北に残っている。その中に、世に文学碑と呼ばれるものがある。古来より今日に至る文芸作品の記念碑であるが、『全国文学碑総覧』によれば、2006年3月現在で総数はおよそ80,000基を超えると推定されている。

和歌、狂歌、俳句、川柳、漢詩、詩文、歌謡曲、唱歌・童謡、抒情歌、寮歌、軍歌、民謡、等幅広く含まれ、旅すればどこでも一つや二つは見かけるのも当然である。中でも多いのが芭蕉の句碑であり、その数3,434と断然の第一位である。次が万葉歌碑で2,443、以下、山頭火、一茶と続く。碑の存在は国民の人気のパロメーターかもしれない。

歌謡曲、唱歌・童謡、抒情歌、寮歌、軍歌の類はその数543基も有り、幅広く愛唱されて来たことの証であり、石に刻まれた近・現代大衆文化の象徴的な存在ともいえそうだ。

カチューシャの唄

歌謡曲という言葉は、NHKラジオが昭和11年(1936)に「国民歌謡」という番組で使い初めたのが最初という。それまでは“流行り歌、とか“流行歌、と呼ばれていた。

流行歌の第一号は「カチューシャの唄」であった。ラジオもなく、レコードの本格的な量産化も始まっていなかった大正3年(1914)、芸術座の帝劇公演「復活」の劇中歌であった。主演女優・松井須磨子が唄い大ヒットした。作詞は劇団の創設者・島村抱月、作曲は中山晋平であった。この歴史的な曲の碑が果たしてあるのかどうか調べてみた。

結論から言えば、唄の流れる歌碑として“復活、存在している。ところは島根県浜田市、島村抱月生誕地顕彰の杜公園に2002年(平成14)に建立されたものがそれである。元々1978年(昭和53)から抱月の顕彰碑があったのだが、メロディは流れないものであった。

一方、歌い手の松井須磨子の碑は歌詞を刻んだ演劇碑が、1953年(昭和28)出身地の長野県松代町林正寺に建てられている。しかしやはり唄は流れないものである。

約100年前に生まれた我が国最初の流行歌が、歌詞だけでなくメロディとともに碑として存在しているのだ。音源はどこからとってきたのか、一度聴いてみたい気がする。

以来ご存知のように、歌は世に連れ世は歌に連れではないが、その姿を変えながら生まれ続け、消え続けてきている。メロディ付きで唄の流れる碑は、調べた限りでは全国に38基あった。その姿を紹介していきたいと思う。実に様々である。

歌手、作詞家、作曲家の顕彰碑

流行歌・歌謡曲が大衆文化として広まった契機は、1925年(大正14)のラジオ放送の開始であり、1927年(昭和2)から相次いだレコード会社の設立であった。昭和の初めには、曲でいうならば「波浮の港」「君恋し」「影を慕いて」など、作詞家なら野口雨情、西条八十、作曲家なら中山晋平、古賀政男などなど。歌手ならば、日本初のレコード歌手にして戦前の歌謡界の女王と謳われた佐藤千夜子、藤原義江、藤山一郎などが名を残している。しかし、作曲家・作詞家の記念館はあっても、戦前に活躍した歌手を顕彰・記念する記念館は佐藤千夜子(天童市)、藤原義江(下関市)だけである。

唄の流れる歌碑は、東海林太郎の顕彰碑が最初で最古のものであったのだ。

戦後に入り歌謡曲が映画とともに、大衆娯楽の花形となる時代がやってくる。歌謡曲の碑も「銀座の柳」(昭和7年)が1954年(昭和29)に建つが、唄の流れる仕掛けはない。従ってどんな曲なのか私は知らない。昭和50年(1975)に東海林太郎顕彰碑が唄の流れる碑として初めて登場したのだが、その次が「異国の丘」(昭和23年)が流れる碑である。昭和53年(1978)に神戸市の須磨寺に「シベリア満蒙戦没者供養塔」が建てられた。その前に熊の石像があり、その頭に触れるとこの曲が流れる仕掛けとなっているらしい。何故か「ミーシャ熊」というとのことである。作曲家・吉田正のデビュー曲となった。

昭和の戦後を代表する歌手といえば、何と言っても女王・美空ひばりである。唄のながれる歌碑の中で最もその数が多いのが、やはり美空ひばりであった。昭和63年(1988)、「みだれ髪」のヒット記念に、歌の舞台である福島県いわき市の塩屋崎に碑が建った。彼女はその翌年、昭和の終焉とともに世を去った。しかしその唄声は今も碑から流れ出ている。その死後、彼女とその唄声を顕彰する碑が、平成の日本に続々と建てられ続けている。註:()内は以下所在地と建立年を示す。

「ひばり観音堂」(福岡市/1991年)、「美空ひばり顕彰碑」(高知県大豊町/1993年)、「花風の港」(那覇市/1997年)、「りんご追分」(弘前市りんご公園/2002年)ここは昨年旅の途中に訪れてみた。碑を建てたのは「全日本りんご追分コンクール会」とあり、碑の前に立てば、ひばりさんの津軽弁セリフ入りの唄声が聞ける。但し彼女の津軽弁は正しくないとの異議があるようだ。「越後獅子の唄」(新潟県月潟村/2003年)の碑は角兵衛獅子の故郷に建つ。最も新しいのが「港町十三番地」(川崎市/2013年)だ。彼女の所属した日本コロムビアの旧工場前の駅構内(京浜急行港町駅)にある。川崎大師線に乗り行ってみた。構内には唄の流れるプレート、歌の解説、さらには列車の到着チャイムメロディと、ひばり尽くしであった。

曲名そのものが碑になっている他に、彼女のどんな曲が流されているか見てみたい。即ち、「川の流れるように」「悲しい酒」「悲しき口笛」「愛燦々」など幅広くおそらく10曲以上はあると思われる。「ひばり観音堂」は10曲からボタンで選曲できる仕掛けのようであるが1曲100円、こうなるとまるでジュークボックスのようだ。JASRACに著作権料を支払っているのではあるが。

歌手個人を顕彰するための碑では「春日八郎」(会津坂下町/1992年)、「細川たかし」(北海道真狩村/1994年)、「三波春夫」(長岡市/2002年)に唄う銅像がある。いずれも彼らの出身地が顕彰のため、観光振興のために建てたようである。細川たかしは、いまだ現役バリバリの歌手だが既に銅像があるとは！北海道にはもう一人、現役ながら顕彰碑がある歌手がいた、松山千春である。「大空と大地の中で」(足寄町/2006年)の碑がデビュー30周年記念に町民の署名運動と寄付金で建てられたとある。歌う政治家になるのかも。

昭和を代表する男性歌手といえば、故人では他に村田英雄(佐賀県)がいる。彼には記念館はあるが唄う銅像はない。三橋美智也にも銅像はない。

歌手その人の顕彰ではないが、鹿児島県の甑島に1998年(平成11)、「おふくろさん」(1973年)の碑が建った。前に立てば森進一の熱唱が流れてくるらしい。彼の母親への顕彰歌であろう。同じ九州出身の武田鉄矢には「母に捧げるバラード」(1974年)という曲があるが、こちらにはまだモニュメントがない。

歌の舞台にちなんだ歌碑

唄の流れる碑で、歌手にちなんだものの次に多いのが歌の舞台にちなんだものである。いわゆるご当地ものであり、その土地への観光振興貢献への顕彰からだろう。曲がヒットした年の順に整理してみればこうなる。

「あゝ新撰組」京都市: 1955年(昭和30)

新撰組は時代を越えて人気のコンテンツであるが、京都の壬生寺にこの歌の碑がある。この付近は彼らの屯所があった新撰組ゆかりの地である。京都に旅した折に訪れてみたが、寺の広い境内の一角に阿弥陀堂なる建物があり、その奥に新撰組に関する壬生塚という庭があった。参拝料100円で入ると、そこには近藤勇の石像などが立ち並んでいる。「あゝ新撰組」の歌の石碑もそこにあった。見ると1回100円で曲が聴ける

とある。セコイ！と思ったが聴いてみた。“へ加茂の河原あ～に千鳥が騒あぐ……”と、三橋美智也のあの懐かしい高音の唄声が流れてきた。テレビ番組の主題歌であったそう。バージョンが他にもあるという。三橋美智也にはヒット曲が多いが他に碑らしい碑がない、意外である。

それにしても寺は商売上手というか、万事お金か！観光都市京都だからか？ そういえば、「ひばり観音堂」も有料だったな。カネを取られる歌碑はこの2つ以外にはない！

「南国土佐を後にして」高知市：1959年(昭和34)

ペギー葉山が歌い大流行した曲で、翌1960年(昭和35)には早くも歌詞の碑が高知市の五台山公園に建てられている。しかし唄の流れるタイプではなかった。一方、高知市内のはりまや橋には「よさこい節」の碑が1953年(昭和28)からあった。2012年(平成24)、有志者の寄付1,600万円により唄の流れるカラクリが、はりまや橋公園に新しく誕生した。1時間に8分間この曲が流れる仕掛けらしい。お披露目には歌手生活60周年を迎えたペギー葉山ご本人も元気に出席されたという。

「潮来笠」&「潮来花嫁さん」潮来市：1960年(昭和35)

橋幸夫17歳のデビュー曲と花村菊江のヒット曲が生まれたのは、同じ昭和35年のことであった。この二つの曲の記念碑が茨城県潮来市の前川あやめ園にある。唄の流れる仕掛け付きで同時に2005年(平成17)に建てられた。曲の誕生から45年後のことであった。花村菊江さんは既に故人となられたが、二人の唄声は今も潮来の観光に一役かっている。

「釧路の夜」釧路市：1968年(昭和43)

今のようなオネエキャラでは無かった若き日の美川憲一のヒット曲である。彼には柳ヶ瀬ブルース、新潟ブルースのようなご当地ソングがある。しかし唄の流れるものはない。この碑は釧路沖地震(1993)の年、当地でのチャリティーコンサートによる寄付金を元に建てられた。釧路川に架かる幣舞橋ぬさまいばしのもとに、あの声が流れてくるらしい。何度も釧路には行ってはいるが、聴いたことがない。残念！

「伊勢佐木町ブルース」横浜市：1968年(昭和43)

あの魅惑のハスキーボイスの青江美奈の大ヒット曲の記念碑が、伊勢佐木町モールにある。といっても関内駅からやや遠いハズレにあるのが寂しい。2001年(平成13)、商店街の知名度向上や集客への貢献への感謝の念によるものだと思う。ただ彼女はその前年に若くして亡くなっている。生きている内に建ててあげたら良かったのに。

横浜が舞台の歌は数多くある。「ブルーライト・ヨコハマ」(1969年)、「よこはま・たそがれ」(1971年)、などなどである。しかし碑はないのだ。「港が見える丘」(1947年)という曲の記念碑が“港が見える丘、公園にある。曲にちなんでの命名らしいが一字違うところが面白い。

碑はただの石碑でしかないが、平野愛子のベルベットボイスが聴ける仕掛けがあれば、あの公園はさらに素敵な場所となるはずだ。是非唄声を流して欲しい。

「港町ブルース」気仙沼市：1969年(昭和44)

森進一の代表的なヒット曲。歌詞の中では、全国各地の港町が登場するが、碑が建ったのは気仙沼だけである。あの大津波にもメゲズに復興し、「へ宮古、釜石、気仙沼あ～」と今も唄声が聴けるのだ。「中の島ブルース」(1973年)というムード歌謡では、札幌・大阪・長崎と謡い込まれているが、各地に碑はない。

「ふるさと」福井県美浜町：1973年(昭和48)

五木ひろしは苦勞をして人気歌手となったが、彼の故郷の美浜町にある三方五湖レインボーライン沿いの五木園にこの碑がある。何時この碑が建てられたが分からず、問合せたら、1989年“彼の結婚の年ですよ、と教えられた。結婚記念碑なのだろうか？

彼にはご当地ソングの碑が多くあった。「千曲川」(1975年)は長野県の戸倉上山田温泉に1992年に建てられ、「越前有情」(1981年)は越前海岸に曲発売の翌1982年、早くも建てられている。この場所は歌謡曲碑のメッカであり、他に「越前岬」(川中美幸)「雪中花」(五代夏子)「夢越前」(金沢明子)と3基、1994年相次

いで建てられている。しかし唄が流れるのは五木ひろしの声だけである。やはり地元出身への敬意なのだろうか。

岡山県赤磐市の旧吉井町の城跡公園に、「吉井詩情」(1995年)の碑がある。全く聞いた事のない曲なのだが、昔の天守閣を模した展望台の入り口にセンサー付きで仕掛けられているようだ。1995年建立らしいので曲の発売と同じである。観光客誘致の狙いで建てたのかもしれないが、曲は思いの他ヒットしていない。アテが外れたと言うべきだろう。この後20年間、歌謡曲を記念した碑は建てられていない。

因みに美空ひばりの次に「唄の流れる碑、が多いのが五木ひろしであった。

「津軽海峡冬景色」青森県:1977年(昭和52)

「唄の流れる碑、でよく知られているのが、この曲ではなからうか? 阿久悠作詞、三木たかし作曲の名曲であり、石川さゆりをスターにした曲だ。竜飛岬にある碑が有名だが、以外と知られていないのが、青森港にあるもう一つの碑である。旧連絡船八甲田丸の側にあるが、実は1995年こちらの方が先に建てられている。一番の歌詞に因んでいる。この碑に刺激を受けて出来たのが、竜飛岬の碑である。翌1996年のことであり、こちらは二番の歌詞に因んでいる。順番通りである。観光PRに絶大な貢献をしている碑だろう。

「渡良瀬橋」足利市:1993年(平成5)

作詞も手がける歌手・森高千里のヒット曲を記念したセンサー付きの碑が、渡良瀬橋北側のたもとにある。1993年、新曲作詞の際、特にイメージが湧かず困り、橋の詞を作ることにした。地図を広げ「言葉の響きの美しい川や橋」を探し「渡良瀬川」という文字が気に入ったからだという。彼女は1989年に足利工業大学でライブを行っており、足利市内に渡良瀬橋という橋があることを知っていた。現地を再訪して橋の周辺を散策、そのイメージを使って詞を書いたという。彼女は熊本育ちで足利市とは縁が無い。観光PRソングではないのだ。碑は2007年に建てられている。碑から唄が流れている歌手のなかで彼女は最も若い! 今でも若々しくカッコいいオバサンである。しかしこの曲を私は聴いたことがない。

碑のないヒット曲・名曲

カチューシャの唄から渡良瀬橋まで、ここまでで30曲の唄の流れる碑を見てきた。

しかし、時代を代表する曲、ヒットした曲、愛唱されてきた曲に、必ずしも記念碑があるわけではないことに気付かれたことと思う。戦後間もない生まれの私からすれば、意外な曲に碑が無かったりするのだ。

戦後のイメージといえば、「りんごの唄」(1921年)や、「青い山脈」(1949年)が思い浮かぶ。記念碑は秋田県・横手市の真人公園、青森県・白神山地にあるが、いずれも唄は流れない。どちらも映画の舞台となったところでその主題歌だった。

『昭和の流行歌物語』(塩澤実信著)には、「こころに残るベスト・テン曲、の項目がある。昭和55年(1980)秋の「明治・大正・昭和、三代の歌謡曲『ベスト100』」の調査データを紹介している。1003曲の候補曲を調査研究者が好意支持率を纏めたものである。そのベスト3は「青い山脈」「くちなしの花」(1973年)「星影のワルツ」(1968年)、であり、他には「北の宿から」(1976年)「影を慕いて」(1932年)、「津軽海峡冬景色」「北国の春」(1977年)「瀬戸の花嫁」(1972年)が上位10に入っている。この中で唄が流れる碑があるのは、「石川さゆり、だけなのである。かろうじて記念碑があるのは、「影を慕いて」「北国の春」なのだが、作者や作詞家の所縁の地である。題名に明確な地名が入っていないと、碑になりにくいということなのだろう。ただ「瀬戸の花嫁」は、瀬戸内海沿いの香川、愛媛、岡山の各県の幾つかの駅で、碑はないがそのメロディが流れるという。

一方この調査には、調査時点が古いという制約があり、それ以降の時代をつかみきれていない。そこで、今カラオケで歌われている演歌の人気曲をネットで調べてみた*。お酒にもカラオケにもほとんど縁のない私にはピンとこないところもあったが、2015年6月時点のベスト・テンは以下の通りであった。

1位「天城越え」2位「津軽海峡冬景色」3位「つぐない」。以下「時の流れに身をまかせ」「酒よ」「また君に恋してる」「南部蝉しぐれ」「北の旅人」「雨の港町」、ときて10位にひばりの「愛燦々」だ。五木も細川たかしも千昌夫も姿が見えない。やはりここでも、石川さゆりが強い。ひばりは忘れられつつあるのか

も。ジャンルを問わない2010～2015の最新ベスト100というデータを見てみた。「天城越え」でさえやっと39位でしかない。曲名、歌手名のどれも聴いたことがないものばかりである。英語やカタカナの題名がとても多い。ついて行けない、ここは日本か？

(※ データは「カラカイーカラオケ解説サイト」:2015/6月調べ による)

「日本の歌百選」なるものが2006年文化庁などにより選出されている。国民に広く愛唱されてきた名曲を幅広く選んだものという。新しいところではSMAPの「世界に一つだけの花」も入っている。この中で「唄の流れる碑」があるのは、「故郷」「早春賦」「浜辺の歌」に加え「川の流れる」だけの4曲であった。

叙情歌の碑

「琵琶湖周航の歌」のように、唄の流れる碑で目立つのが童謡・唱歌・叙情歌の仲間である。調べてみれば、まず「早春賦」の碑が安曇野にあった。このすぐ側を歩いたことがあるが行かず終いとなった。大正2年(1913)の曲で、昭和59年(1984)建立と古い。

大正3年(1914)の曲で、へ幾とせ故郷来てみれば...の歌詞で知られる「故郷(ふるさと)」の碑が作曲者の岡野貞一の故郷・鳥取市にある。実はこの碑は昨年リニューアルされたばかりの3代目である。初代は昭和48年(1973)建立という。今回のものは、さだまさし他8組のデジタル音源が組込まれたセンサータイプである。唄の流れる碑としては、最新のものである。歌の記念碑は、建て替えの際にメロディーBOX付きのものにされていくことになるかも知れない。

「浜辺の歌」(1918:大正7年)という曲がある。“あした浜辺をさまよえば.....”といえ、すぐメロディが思い浮かぶはずである。この曲に因んだ記念館がある。北秋田市の米内沢という内陸の町にある。なぜ海と関係がないのにここに有るのかといえ、作曲者の成田為三の出身地だからである。彼には、「かなりや」など他にも知られた曲がある。

米内沢には、秋田内陸縦貫鉄道というローカル線に乗る旅の途中で泊まったことがあった。閉館時間が迫っていたが、駆けつけてみれば立派な音楽堂であった。2階のホールには、ロボットの成田為三がピアノに向かって演奏する舞台があった。来館者は決して多くはないと思われるのだが、とても素晴らしい冊子を記念に頂戴できた。郷土の誇りとして敬愛されていることがよく分かるのだ。曲の名前を冠した記念館は珍しく、他には「月の砂漠記念館」(千葉県御宿町)ぐらいではなかるうか？

岩手県の新花巻駅前には、宮澤賢治の「セロ弾きのゴーシュ」彫刻碑がある。彼が作詞・作曲した「星めぐりの歌」(1934年)が流れる仕掛けがある。新幹線開業記念として1980(昭和60)年に出来たものという。

尾瀬といえば、「夏の思い出」(1949年)が今でも愛唱されている。内村直也作詞、中田喜直作曲の名曲だ。この作曲家の父親が中田章、あの「早春賦」を作曲した人だという。この曲のメロディが流れる碑が尾瀬の福島県側の会津檜枝岐村・ミニ尾瀬公園にある。南側の群馬県片品村にも碑があるが、こちらは詞碑である。作詞家・江間章子ゆかりの梅田屋旅館前にあるらしい。中田喜直といえば他にも心に残る曲がある。

「雪の降るまちを」である。「夏の思い出」の三年後、ラジオ最盛期の1952年(昭和27)の曲である。夏に対してこちらは冬だ。よく訪れた雪の降る鶴岡をイメージして曲が出来たといい、鶴岡公園に「発想の地記念モニュメント」が1996年建てられた。鶴岡駅前にもう一つ碑(1987年)があるが、こちらは普通の碑だ。北海道旭川市にもこの曲の碑(2001年)があるが、こちらも歌のイメージの街だと主張している。雪の降り方而言えば、こちらの方がイメージに合っているかも知れない。碑からメロディは流れないが、冬季には街頭放送から流れるという。

童謡・唱歌の碑

叙情歌、唱歌や童謡の歌碑は、明治・大正から昭和にかけての有名な作詞家・作曲家に関わるものが多い。歌の舞台とともに長野県、茨城県などが特に目立つようだ。

作詞家では、野口雨情、北原白秋、三木露風、林古溪、西条八十、高野辰之など。作曲家では、中山晋平、滝廉太郎、弘田竜太郎、山田耕筰、海沼実、古関裕而などである。

しかし曲が流れる碑となっているのは少なく、先にみた「故郷」くらいのものである。あの「荒城の月」(明治34年:1901)でさえそうである。ただ、豊後竹田市には岡城跡があり滝廉太郎との関係が深いとして、記念館の他にメロディ舗装された道路とか、駅の列車接近時のチャイムなど町中に「荒城の月」が流れるとのことである。

鳥取県の袋川沿いには「ふるさと歌の道」(2012年)がある。ここには、メロディBOXがついた陶板の碑が4基あり、「故郷」「春の小川」「花咲爺」「大黒さま」の4曲が聴ける。鳥取県出身の作曲家、岡野貞一・田村虎蔵を顕彰するものである。

このように童謡を集めて記念した場所に、和歌山県すさみ町の海に面した「日本童謡の園」(1987年)、兵庫県龍野町の「童謡の小道」(1987年)、岡山県井原市の中国地方の子守唄に因んだ「子守唄の里ロード」(2010年)などがあるが唄は流れない。

唄の流れる仕掛けには、人が近づくとセンサーが働いたり、ボタンを押すと流れるメロディBOXとかオートサウンドシステムとか呼ばれるものがある。道路への仕掛けはどうなっているのか？誰がいつ発明したものなのか、製造メーカーはどこか？、著作権はどうクリアされているのか？など、私には不明だ。また知らないことが増えてしまった。

碑のカタチとしては「東海林太郎」の顕彰碑(1975)がその最初のように思えたのだが、一つだけ特異なものが昭和43(1968)年に登場していた。神戸市の須磨寺にある「青葉の笛」の碑である。この唱歌は明治39(1906)年に出来た古い曲で、私も知らない曲だ。ネットで調べた限りでは、この碑には一音ずつボタンを押して曲を演奏する仕掛けがある。いわばキーボード付きということになる。これが最古の“唄の流れる碑、なのかも知れない。但し歌声は流れないのだが。

私のココロに残っている子ども時代の懐かしい歌といえば、まずは、「お山の杉の子」だ。今は亡き親父が、病気がちの母親に代わって朝ごはんの用意をしてくれていた頃の歌だ。

この歌を口づさみながら、家事をしていたことを思い出す。この曲は戦時中に、国民からの公募で作られた曲らしいのだが、戦後流行している。歌碑は、徳島県穴喰町と青梅市の御岳溪谷にあるようだ。残念ながら曲は流れない。YouTubeで聞いてみるか。

もう一つの曲は、「里の秋」だ。小学生の時、クラスに才色兼備で歌の上手な少女がいた。その子が皆の前で歌ったことを憶えている。この曲は「川田正子」という少女歌手が昭和23年レコード化して広まったとある。4年生の終りに、かの少女は転校したから、昭和32年頃の思い出である。ただ、歌詞の「おせどに...」の意味が「お背戸」であり、それが何かを、大人になっても理解ができなかった。何せ田舎の暮らしを知らない少年だったから無理もないのだ。曲の流れない記念碑が、作詞者(斎藤信夫)の故郷、千葉県成東町にある。

唄の流れる碑の行く末

東海林太郎の顕彰碑から始まり、“唄の流れる碑、は今まで造られ続けてきた。その建てられた時期をみてみれば、バブル時代(1986~1991)の後、平成になってから昭和を偲んで建てられたものが大半だと思える。それは美空ひばりの顕彰であり、五木ひろしであった。歌謡曲、演歌の全盛期の産物、昭和の記念碑のような気がする。

流行歌はどんどん変わってきた。歌謡曲からフォーク、GS、ニューミュージック、J-POP。山口百恵、松田聖子、ピンクレディ、彼や彼女達に碑はない。碑がある最も若い人が森高千里、1969年生まれの可愛い

オバサンなのである。“昭和歌謡は遠くになりけり、だ。歌謡曲という言葉は絶滅危惧種とっては言い過ぎか？ 歌謡曲は昭和と共に、いや、美空ひばりとともにその終焉を迎えているかのようだ。

歌を取り巻くメディアの変遷、進化にも激しいものがある。ラジオからテレビ、そしてWebで聴く時代へ。レコードからラジカセ、CD、そしてスマホで音楽配信の時代へ。携帯化、パーソナル化が進み、今やヘッドホンが耳の一部になっているかのようである。

唄う文化も変わってきた。1970年代に登場したカラオケである。8トラから、カセット、映像カラオケ、1992年からは通信カラオケの時代となった。カラオケBOXが登場したのは1985年というが、今やカラオケ文化は世界中を席卷しているらしい。

携帯音楽やゲームとカラオケは似ているところがある。どちらも自分だけの世界にこもる自閉症文化ではなかるうか？

唄の流れる碑のある場所は、多くは地方にある。人里はなれた景勝地や公園の中にある。東京や大阪といった都会にはない。「銀座の恋の物語」とか「あゝ上野駅」が流れる碑があっても良さそうだがない。騒音発生装置となりかねない、あるいは周りが騒々しいから聞こえないからであろう。そういえば伊豆の「浄蓮の滝」には「天城越え」の曲は流れない。きっと滝の音が凄いらだ。

昭和歌謡は自然や人間の情緒を歌詞として歌い込んだ曲が多い。今と違って、きちんと歌詞があった。詩人たちが作詞をした時代であった。だから歌の舞台や作詞家を顕彰するモニュメントは、おそらく今後生まれてこないのではないか。

阿久悠は、その著書の中で「歌う歌、踊る歌はあっても、聴く歌は求められなくなった……歌の文化は痩せている」と書いている。としたら、聴く歌が少なくなってきた今、やはり“唄の流れる碑、は衰退することになるのではなかるうか。

唄の流れる碑で歌謡曲の他に存在したのが、童謡・唱歌・叙情歌であった。これらの碑は数は少ないが、逆に増えていくかも知れない。曲そのものに名曲が多く、時代の変化に耐えるものだからである。また多くは子供の頃に、家庭の中であるいは学校で教わるものだからである。

小中学校でどんな曲が教えられているのか、音楽の教科書を調べてみた。小1から中3までの9年間で、約200曲以上の歌が掲載されている。耳に馴染んだ歌が網羅されている。「赤い靴」「てるてる坊主」「桃太郎」「金太郎」など、時代の変化で消えた歌もある。逆に私たちの子供時代にはなかった、と思われる曲があった。「翼をください」「上を向いて歩こう」、PPMの「パフ」などだ。

「故郷(ふるさと)」の碑が、近年ミュージックBOX付きのタイプにリニューアルされていたことを先にみた。石碑の寿命は、100年以上(手入れ次第だが)あるようだが、建替え時に、唄の流れるタイプに変える動きの始まりかも知れない。流行り廃りのある流行歌と違って、歌の寿命が長いはずである。子供たちへの教育とともに、碑から唄声は流れ続けて欲しいと思う。

テレサ・テン

最新カラオケ人気曲(演歌)のベスト3位と4位が「つぐない」「時の流れに身をまかせ」であった。いずれもテレサ・テンである。彼女は20年前の1995年に亡くなったが根強い人気を保っているようだ。日本の歌謡曲の女王が美空ひばりなら、アジアの歌姫がテレサ・テンである。中国大陸生まれの両親を持ち、台湾生まれの彼女は香港、シンガポールなど華人世界で抜群の人気歌手なのだ。テレビの番組で没後20年の追悼特番があり、彼女の歌声を懐かしく聴いた。香港映画の「ラブソング」(1998年日本公開)では、彼女のヒット曲が効果的に使われていたことを思い出す。たまたまであるが、台湾に或るイベントで参加するため台北に行く機会ができた。彼女のお墓が近郊の金山墓苑にあり、そこでは彼女の唄声流れる仕掛けがあるらしい、と聞いたのだ。ならば、是非とも確かめたいとなった。スケジュールの隙間を使い、タクシーで往復3

時間かけ島の北端にある、そこに赴いたのである。生憎の雨模様でもあり、彼女の華麗な唄声が行く仕掛けがあることを確かめただけで、慌しく帰ったのが心残りとなった。

帰国後に、その由来を中国語に堪能な友人の力も借り、調べてみた。中国語、広東語、台湾語、英語、日本語で彼女の代表曲「何日君再来」「小城故事」など10曲がランダムに入っているらしいこと、没年と同じ1995年の8月頃完成である、と後ほど知れた。

思えば「唄の流れる碑」が、日本以外の国にあるとは今まで聞いたことがない。テレサ・テンの碑が初めてなのではなかろうか？ 歌にまつわる歌手、作詞家、作曲家を顕彰すべく、唄の流れる仕掛けのついた碑を建てるのは、日本の発明した文化なのだ。アジアの歌姫、テレサ・テンはその文化とともに、今も多くの人たちに見守られ、彼女のヒット曲の流れるなか墓苑で眠っている。

参考資料

- 『愛すべき名歌たち』/阿久悠著/岩波書店/1999年刊
- 『童謡・唱歌・叙情歌 名曲歌碑50選』/鹿島岳水著/文芸社/2005年刊
- 『全国文学碑総覧』/新訂増補版/宮澤康造・本城靖 共編/日外アソシエーツ社/2006年刊
- 『親子で歌いごう日本の歌百選』東京書籍/2007年刊
- 『昭和の流行歌物語』/塩澤実信著/展望社/2011年刊
- 『歌謡曲』高 護著/岩波書店/2011年刊
- 『小学生の音楽/中学生の音楽』/(教科書)教育芸術社/2012年刊
- 『歌がつむぐ日本の地図』/帝国書院編/2013年刊
- 『テレサ・テンが見た夢』/平野久美子著/(株)筑摩書房/2015年刊
- 「カラカイーカラオケ解説サイト」kyosuke61.info/karakai/index.html 他Webサイト多数。